

2022年2月24日

2021年度聖路加国際大学大学院看護学研究科  
課題研究

**血友病保因者の分娩方法選択における経験**

**Experiences in the Selection of Delivery Method  
for a Hemophilia Carrier**

20MN015

近藤 せい

## 要旨

【目的】血友病保因者女性（以下、保因者）の分娩方法選択における経験について記述することである。

【方法】対象者は、保因者であることを認識し、1人以上の児の分娩を経験しているものとし、血友病家系の女性・保因者に対する情報提供や相談事業等を実施している1団体を通してリクルートした。インタビューは、オンライン会議システム（Zoom）を利用し、対象者背景および分娩方法選択に関するインタビューガイドを用いて60分程度実施した。インタビュー内容は、対象者の同意を得て、録音し、逐語録に起こした。逐語録のデータをもとに、Giorgiにより示された現象学的アプローチの手法を参考に分析した。なお本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会にて承認を受けたのちに実施した（承認番号：21-A036）。

【結果】インタビューの対象者は、10代後半で保因者であることを知った、20代前半の確定保因者1名（父親が重症血友病A）であった。保因者の分娩方法の選択における経験として、【分娩方法の選択】、【保因者として母になること】の2つのテーマが抽出された。【分娩方法の選択】は、《自分の望み》、《課せられた制約と自分の望みとの葛藤》、《さまざまな価値観や経験をもつ人たちの存在の認識》、《納得した選択》、《母親に期待される選択》の5つのサブテーマで構成された。【保因者として母になること】は、《自分が保因者であることの認識》、《病気を伝えることの重圧》、《保因者であることが妊娠・分娩の中心》の3つのサブテーマで構成された。保因者の分娩方法選択は、自身が保因者であることを認識したなかで、分娩方法に対する何らかの望みを持つことから始まった。その自分の望みと課せられた制約を認識したとの間で葛藤が生じていた。その葛藤は、さまざまな価値観や経験をもつ人たちの存在を認識するとともに、自身の価値観と向き合うことで納得した選択することになった。また、分娩方法選択の後には、それに対する他者評価を認識し、自分の中での思いが生じていた。

【結論】保因者の分娩方法の選択は、自分の望みとさまざまな制約との間で葛藤が生じた中で、関わる人たちの存在を認識し、自身の価値観と向き合うことにより納得した選択をできるようにすることが必要である。そのためには葛藤状態にある保因者の不安や悩みを傾聴するとともに、正しい情報・知識を知ることができるように支援することが重要であり、周産期・新生児・遺伝などのそれぞれの専門分野の看護職が協働して支援を行うことが必要となる。加えて、保因者の選択を結果のみで評価せず、プロセスを理解するとともにその選択を支持し続けることが必要であると考えられる。